



デュルケムの構成的実践概念にみる相互行為研究の萌芽 : アン・ロールズの社会学史研究をもとに (特集2 「状況の社会学」の展開可能性)

粕谷, 圭佑

(Citation)

社会学雑誌, 41:134-148

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503755>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503755>



特集2 「状況の社会学」の展開可能性

デュルケムの構成的実践概念にみる相互行為研究の萌芽

—— アン・ロールズの社会学史研究をもとに ——

粕谷 圭佑

奈良教育大学教育学部准教授

一 問題設定

本稿は、アン・ロールズの社会学史研究の成果を踏まえ、デュルケムが『社会分業論』(Durkheim, 1893 = 二〇一七)のなかで論じたとされる「構成的実践 *constitutive practice*」概念が、その後の社会学、とりわけ相互行為に焦点をあてた研究にいかなる影響を与えたのかを検討する。

社会学者アン・ロールズ (Anne Warfield Rawls) は、国内では主にエスノメソドロジーの創始者であるハロルド・ガーフィンのアーカイブス管理者として知られているが、近年、同アーカイブスの史料調査に基づいた社会学史研究の成果を精力的に発表している。この社会学史研究のなかで、アン・ロールズは、デュルケムからゴフマン、ガーフィンを連なる社会学理論の再構成によって、相互行

為秩序の全体像を明らかにする「状況の社会学 *sociology of situation*」が可能になると主張している。

このアン・ロールズの社会学史研究を構成する重要なキータームが「構成的実践」である。アン・ロールズは、この「構成的実践」が近代社会の秩序要件であるとデュルケムが『社会分業論』のなかで主張していること、またこの概念の重要性がこれまでのデュルケム研究で見逃されてきたことを指摘している。さらに、この近代社会の構成的実践への着目を、経験的研究として発展させた社会学者としてゴフマンとガーフィンの両者を位置づけている。

これまでの社会学史研究においても、ゴフマンとガーフィンをともにデュルケム社会学の影響下にあったことは指摘されてきた (Hilbert, 1995 = 二〇一六)。そのなかでも、アン・ロールズの学史研究は、デュルケムの構成

的实践に基づく社会秩序観にその源泉を見出している点に独自性があるといえる。しかし、アン・ロールズ自身がこの構成的実践概念をどのように捉えているのか、これまで十分な検討がなされてこなかった。そもそもデュルケムは『社会分業論』の本文内では「構成的実践」にあたる言葉それ自体は使用しておらず、アン・ロールズが本書を読み解くことを通してターム化したものと考えられる。こうした構成的実践への着目が、いかにゴフマンやガーフィンケルにつながるものであるのかも、未だ十分に検討されていない。

こうした状況を踏まえて、本稿では、アン・ロールズによる近年の社会学史研究を概観し、特にその学説史のキーワードである「構成的実践」概念を読み解くことで、現在の相互行為研究の学説史的位置づけを再検討する新たな視座を得ることをねらいとする。

二 アン・ロールズと「状況の社会学」

アン・ロールズ(一九五〇⁽²⁾)は、ボストン大学で社会学、哲学、古典学を専攻し、一九八三年に博士号を取得している。日本ではあまり知られていないが、アン・ロールズ自身の研究関心は、相互行為的人種秩序(interaction orders of Race)にある。この人種秩序への関心は一九七一年(つ

まり学部生時代)にハーバード大の夜間学校プログラムに参加した際に、アフリカの宗教・哲学の講義と、アメリカにおける黒人政治の歴史の講義から受けたことも大きく影響していると、本人によって語られている。

アン・ロールズのエスノメソドロジャーへの関心は、一九七三年ボストンのウイローック大学で、ゴフマン、ガーフィンケルの研究を知ったことがきっかけであるという。翌年にはボストン大学に入学し、ジョージ・サース、ジェフ・クルターに師事する。この時期、会話分析の創始者として知られるハーヴェイ・サックスや、アニータ・ポメラントもボストン大学で教えている。ガーフィンケルとの出会いは、一九七五年ボストン大学サマーセミナーであり、二〇〇八年からガーフィンケル・アーカイブスの管理人を担っている。

アン・ロールズはデュルケムからゴフマン、ガーフィンケルに連なる社会学史の再構成が、相互行為秩序の全体像を明らかにする「状況の社会学 sociology of situation」を可能にする主張している(Rawls, 2009)。このことはたとえば、ゴフマン研究のハンドブックに寄せた論文のなかで次のように述べられている。

「ゴフマンの業績を正しく理解しないことによって」一般的に成功していないことには、いくつかの理由が

ある。第一に、社会学という学問領域が、社会的実践の概念的な見方に重きを置いていることである。その結果、誤認されているのはゴフマンやガーフィンケルだけではない。デュルケムによる初期の議論も同じ運命をたどっている。第二に、状況の社会学、すなわち相互行為秩序の全体像を明らかにした相互行為論者は一人もいない。少なくとも、首尾一貫した状況の社会学には、ゴフマンの「状況的な自己」とガーフィンケルの「状況的な理解可能性」の両方が必要である。これが達成されるまでは、それぞれが相容れないより伝統的な視点に別々に取り込まれ続けるだろう。第三に、社会秩序を形式的・制度的なものとして扱う概念モデルに挑戦する中で、ゴフマン自身、相互行為秩序を重視する彼の姿勢と矛盾する社会秩序の概念的性質についての仮定に、ある程度まで巻き込まれてしまった。第四に、ギデンズ(1984)のように両者を結びつけようとする試みは、そのビジョンの重要性にもかかわらず、ゴフマンの概念化された見方から構築されたものであり、具体的実践を重視するガーフィンケルから構築されたものではない。その結果、実践を身近な概念的用語で扱い続けているため、失敗に終わっている。状況的な実践の首尾一貫した理論には、実践の細部それ自体を社会的秩序として扱うことが必要である。

(Rawls, 2003: 217 傍線強調は引用者による)

「状況」に関心を持つ社会学が、実践の細部に着目し、その細部自体に秩序を見て取ることは、ゴフマン理論やエスノメソドロジーに馴染みのある者であれば、すぐさま納得のいく主張であろう。そうした試みが相互行為秩序の解明に向かうことも疑問の余地がない。むしろここで注目したいのは、アン・ロールズが状況の社会学という言葉で指すのが、相互行為秩序の「全体像」を明らかにする理論であり、その萌芽を「デュルケムによる初期の議論」にみている点である。以下では、まず、デュルケムの初期の議論がどのような位置づけを与えられているのかを整理し(第三節)、アン・ロールズが「状況の社会学」に連なる社会学史を構成するにあたり必要としているキータムを確認することで(第四節)、「状況の社会学」において相互行為研究が社会学の本質的課題を担うものとして捉えられていることを確認していく。

三 デュルケムの「構成的実践」概念

アン・ロールズの近年の整理では、次の四つの理論的概念が組み合わされて、それまでの社会学(たとえばシカゴ学派)とは代替的な相互行為の社会学の系譜が形作られて

いる。

- ①デュルケム 構成的実践 (constitutive practice)
- ②ガーフィンケル 信頼条件 (trust-condition)
- ③ゴフマン 状況的自己呈示 (situational self-presentation)
- ④デュボイス 二重意識 (double-consciousness)

上記のうち、①デュルケムの「構成的実践」は、ゴフマンやガーフィンケルに連なる社会学の課題の発見として、ひとつ上位の位置づけを与えられていると言える。そこで、まずは、この「構成的実践」概念をアン・ロールズがデュルケムからいかに見出しているのかを確認する。

三・一 コンセンサスと構成的秩序の対比

社会秩序の解明に取り組む社会学にとって、その秩序性をいかに特徴づけるかは理論的な心臓部と言っても良い。アン・ロールズは、まさにこの社会秩序の捉え方に、デュルケム独自の発見があったと指摘する (Rawls, 2021)。

彼女の主張は次のようなものである。コントを初めてとする社会学の始祖らは、社会的事実や意味の一貫性は象徴・信念・価値に関するコンセンサスに依存する、という考えを持っていた。しかし、コンセンサスに基づく社会秩序は、社会の近代化によって多様性と専門性が増大すること

維持できなくなってしまう。こうした問題に対して、デュルケムはコンセンサスに基づかない秩序が近代以降の社会と、未開原始社会において達成されていることへの気付きから、別様の社会秩序観を発見したと、ロールズは指摘する。

この問題に対する解決策は、デュルケムが『社会分業論』(一八九三年に初版、一九〇二年に第二序文が出版)の中で初めて提唱したもので、コンセンサスを必要とせず、本質的に道徳的である第二の社会的事実の発見である。このような実践は、労働が分業化することにつれて専門化した職業や科学において発展したものであり、独自の対象や意味を創造する。そのため、これらの実践はコンセンサスを必要とせず、したがって伝統的なコンセンサスが侵食されることは彼らにとって問題ではない。その首尾一貫した使用には、デュルケムが正義と同一視する程度の自由と互恵性が要求されるため、それらに依存しても道徳的秩序の欠如にはつながらないのである。(Rawls, 2021: 227-228)

コンセンサスを必要としない本質的に道徳的な実践は、信念の共有ではなく、実践の共有による感情的な連帯感によって達成される。こうした秩序(構成的秩序)を構成す

る実践にアン・ロールズは「構成的実践」という言葉を与えている (Rawls, 2012)。デュルケムは、上記の引用でも述べられているように、こうした視点をすでに『社会分業論』から持っていたという。

デュルケムは『社会分業論』において、オーストラリアの原住民の宗教的実践から引き出された多くの例を用いて、彼が機械的集団と呼ぶものにおける連帯は、集団のメンバーの感情生活を一致させるようにデザインされた実践の相互実施に依存しており、そこで彼が「集団的沸騰」と呼んだものを生み出していると説明している。彼はまた、この本のなか(第三卷第一章)で、信念は二次的で回顧的な現象にすぎず、参加者が共有の実践を相互に行うことによって自分の中に生じた感情を説明しようとする試みから生じるものであると主張した。(Rawls, 2004: 4)

多様な集団が分化していく近代社会では、コンセンサスに基づく社会秩序は破綻する。それに対して、オーストラリアの原住民やヨーロッパの同業組合にみられる連帯は、共同体による実践を通して、道徳的な秩序を構成する。これが、デュルケムが発見したコンセンサスに基づかない社会秩序観であった。もちろんこうした見方は、これまでの

デュルケム研究でも指摘されてきたことである。たとえば、『社会分業論』の邦訳において、訳者の田原音和は「分業の機能が社会的であることを保証するのは、ひとえに分業が道徳的事実だからであった」と本書の要点を強調している (Durkheim, 1893 = 二〇一七: 744)。アン・ロールズのデュルケム理解のポイントは、連帯をもたらす道徳的事実が、信念の共有 (コンセンサス) によってもたらされるのではなく、その参加者たちの共同実践によってもたらされるという点にある。すなわちここでは、社会が文化による信念の共有によってもたらされるという文化論的社会秩序観を問い直し、その共同体の中で行われる実践に研究の焦点を合わせるデュルケムの方針こそが評価されているのである。

三・二 構成的実践と相互行為の道徳性

アン・ロールズがデュルケムの「構成的実践」に殊更その意義を認めるのは、構成的実践を可能にするための「認識の共有」(記号、行為の理解可能性) もまた、実践によって生み出されることにデュルケムが気づいていたからであった。たとえば、アン・ロールズは『宗教生活の基本形態』(Durkheim, 1912 = 二〇一四) において見落とされがちな論点として、デュルケムが社会の存立理由を共有の認識対象を生み出すことにあるとし、それを生み出すのは信念で

はなく社会的実践であることを論じていることである、と指摘する (Rawls, 2004)。

このような「認識の共有」を可能にする実践とはいかなるものなのか。ロールズは、このことを以下のように解説する。ここには、後年のガーフィンケルによるエスノメソドロジーの基本アイデアと結びつけた説明が行われているように見える。

意味と行為を相互に理解可能なものにするために、実践に参加する者が互いに期待する方法でその実践を用いることへのコミットメントは、相互に協力することに関する暗黙の社会契約によって縁取られる。これによって、参与者には (一) 伝統から独立した実践の秩序特性を守ること、(二) 相互性と協力を支えるために必要な平等／正義を守ること、(三) 合意による制約から解放された実践を「自己規制」することが義務づけられる。伝統が要約された規則とは異なり、自己規制的な実践 (例えば、行列、科学の実践、銀細工、その他のエスノメソッド) は、秩序化された規則／期待 (例えば、行列に参加するには、最後に並んでいる人の位置を特定し、その後ろに立つ) と、それらの規則に取り組む「方法」から構成されている。このような「実践の秩序」は規範や習慣ではない。また、この

ような実践におけるメンバーシップは、伝統や地位ではなく、能力に基づいている。すべての有能な参与者は、実践の基本的なルールや好ましいルールを方向づけることによって、秩序の特性を生み出しながら、自由に互恵関係を築くことができる。だからこそ、このような実践は、近代に伴う無限の偶発性を軽減する必要なく、急速に変化する科学や職業に意味と一貫性を持たせるために用いることができるのである。(Rawls, 2021: 230)

社会秩序を生み出す構成的実践は、伝統的な信念(実践を生み出す伝統的なルール)に支配されるのではなく、自己規制的に行われることが主張されている。この説明のうち、アン・ロールズ独自の強調点と言えるのが、構成的実践に伴う道徳性が、自由や互恵性(正義)を含意しているということである。以下の引用部では、構成的な秩序観に基づく社会学が道徳(正義)の研究となることが示されている。

デュルケムが言いたいのは、社会秩序、意味、道徳は不可分に絡み合っており、それぞれの社会類型がその必要性に応じて異なる道徳的要求を出しているということである。決定的な違いは、自己規制的な実践

はすべて、自由と正義という啓蒙思想に類似した道德的要求をすることである。このように、自己規制的な構成的実践に焦点を当てた社会学は、三つの点で道德の適切な研究となるだろう。(一)多様な社会において、個人、社会的対象、そして意味は、主として自己規制の実践を用いて達成される。最高の社会的財は自己規制の実践に依存するため、他者とともにこれらの実践を実行する義務を道德的義務とする。(二)そのような慣行を用いて意味を共に作る作業には、参与者が十分かつ自由に参加できるほど平等でなければ不可能な、ある程度の協力と相互配慮が必要である(デュルケムは、『分業論』第三卷第二章で「権力」は有機的連帯における社会的一貫性を無効にすると主張した)。(三)正義と平等は、自己規制の実践を用いるための機能的前提条件であるため、それらがどのように機能し、また機能しないかについての研究は、行動における(暗黙の社会契約の)それらの道德的要件の実証的研究である。(Rawls, 2021: 232, 傍線強調は引用者による)

このようにして、アン・ロールズは、デュルケム由来の社会秩序観が、構成的実践―すなわち、その細部(方法)によって秩序を構成する実践―への着目を必要とし、それ

が道德(正義・自由)の研究に帰結するという図式を描いてみせる。詳細な文献研究に裏打ちされたこの図式は、(そのデュルケム理解が適切であるならば)無視できないものであろう。アン・ロールズによるデュルケムから相互行為研究までに連なる「状況の社会学」の学史は、その照準を「社会の道德の解明」にはつきりと向けているのである。

一方で、これまでのガーフィンケルやゴフマンの理論紹介においては、こうした方向性は必ずしも強調されてこなかったように思われる。そこで以下では、上記の「状況の社会学」の方向性に対する評価をひとまず置いて、彼女自身がガーフィンケルとゴフマンをどのように位置づけているのか、かれらを結びつけるためにどのような理路を用意しているのかを確認していく。

四 「状況の社会学」におけるガーフィンケルとゴフマンの結びつけ

四・一 ガーフィンケルの「信頼条件」

前節でみたとおり、デュルケムから状況の社会学にいたるまでの学史において、アン・ロールズのなかでガーフィンケルの位置づけは重要なものである。これには、ガーフィンケルから多くの教えを受けたアン・ロールズが、エスノメソドロジの視角を用いてデュルケムの読解に及んだで

あろうことも関係しているだろう。

ただし、アン・ロールズは、ガーフィンケルの理論的関心もまた、構成的実践に基づく社会秩序の解明というデュルケムの関心を引き継ぐものとして位置づけている。その図式のなかでは、ガーフィンケルは、デュルケムの見落とされてきた側面 (Rawls, 1996, 2019) — コンセンサスに基づく社会秩序は社会が多様化するにつれて破綻し始め、構成的実践と正義の必要性に立脚した首尾一貫性と連帯を生み出す新たな方法に取って代わられる、というデュルケムの指摘 — を発展させた理論家として整理される。これは前節でみたデュルケムとエスノメソドロジの基本アイデアを結びつける作業につながるものであるといえる。

ガーフィンケルはこの見落としに対して、集団的秩序、相互に理解可能な意味、自己を創造するために用いられる相互行為的互恵関係を構成する、集合的な社会的事実 [collective social-fact making] が形成される詳細なプロセス、彼の言葉で言えば「社会的事物 [social object]」の形成プロセスを記録した。ガーフィンケルは、「コンセンサスを欠く社会的コンテキストにおいて、社会的事物 [social objects] がどのように創造されるのか」という問題を本質的な理論的問題であると考え、社会学者がこの問題に取り組んでいないことを批判し

た。この問いに対する適切な解答があつてはじめて、社会学における多くの理論的矛盾は収束すると彼は主張したのである。それはデュルケムの主張と重なる。(Rawls, 2020: 344, 傍線強調は引用者による)

また、暗黙の社会契約 (構成的秩序) に基づく社会の構成要件を、ガーフィンケルは「信頼条件」として精緻化したと位置づけられている。ガーフィンケルの信頼条件に関する研究 (のちの「信頼」論文) は、一九四〇年代の「ユダヤ人」研究、一九五二年の「医学部入学志願者」研究、一九五八年の「アグネス研究」に起源があり、そこには正義・互恵性への関心があつたと指摘されている。

皮肉なことに、ガーフィンケルが日常生活の見かけ上の「自然さ」を作り出すために多数派の行為者 / アイデンティティが行っている作業を発見できたのは、マイノリティが組織的に遭遇している問題に触発された相互行為上の違背 [breaches] に関する研究を通じてであつた。アイデンティティを達成することが常に困難であることを経験する人々は、「普通の人々」が生活を普通で永続的なものに見せるために「暗黙のうちに」行っていることを明らかにすることができ

出すために使用される構成的な期待、およびそれらが必要とする平等と互恵性へのコミットメントを露わにする。参与者は、首尾一貫した意味を達成するために、こうした期待に応えるよう暗黙のうちに互いを信頼しなければならない。期待が満たされない不平等な状況では、相互行為にトラブルが生じ、修復努力（これも信頼条件に依存する）が成功しなければ、相互行為は破綻 [break down] する。ガーフィンの立場の中核には、契約主義的な社会正義の主張がある。（Turweitz and Rawls, 2020: 7, 傍線強調は引用者による）

こうしたアン・ロールズによる「社会正義」を強調した整理は、ガーフィンの初期論考の調査に基づくものであり、後年のエスノメソドロジীরプログラム化においては、必ずしも前景化しているとはいえない。この点について、アン・ロールズは、ガーフィンがデュルケムの理論を自身の研究の基礎に据えるかどうか逡巡していたことが報告されているが、「正義」への関心はやはりアン・ロールズ自身による強調であるようにみえる。

四・二 「フマンの『状況における自己呈示』」

冒頭述べたように、アン・ロールズは、状況の社会学においては、ガーフィンだけだけでなく、ゴフマン理論も

含めて構成する必要があると主張する。そのなかで、ゴフマンの「状況における自己呈示」のアイデアは、デュルケムの構成的実践と関連させて理解する必要があるとしている。

その理論構成は、ガーフィンの「信頼条件」とデュルケムの結びつけ方と似ている。相互行為的な自己呈示のパフォーマンスにおいては、他者によるその確認が、個人としてのアイデンティティを生み出す。この個人と自己に関する相互行為的で脆い社会的事実を達成する要件として、「道徳的義務へのコミットメント」（＝ワーキング・コンセンサス）が相互行為的要件として位置づけられ、暗黙の社会契約を構成する。このワーキング・コンセンサスとは、自己の達成に影響を与える相互行為的不平等について検討し、相互行為の基本的ルールにおける平等を達成することである。それゆえ、ワーキング・コンセンサスに對等な立場で参加できる場合は自由な個人となり、ワーキング・コンセンサスが制度的に不平等な場合には、抑圧される。だから、ゴフマンが『ステイグマ』で描いたように、社会の「正常な」構成員として「パス」するために、個人的経歴の側面（ユダヤ人、黒人、トランスジェンダー、てんかん患者であることなど）を隠すことが参与者に要求される、というわけである（Rawls, 2022）。

また、ゴフマンのこうした自己論は、「自己に関連する

関与の義務がなぜ理解の達成に不可欠なのかについての理解を提供する」ものであり、ガーフィンの議論からは欠落しているであるとアン・ロールズはみなしている (Rawls, 2003: 224)。それゆえ、アン・ロールズにとっては、相互行為の理論の「全体像」の解明のために、ガーフィンのみだけでなくゴフマンを必要としたのだといえるだろう。

四・三「デューボイスの「二重意識」

上記に加えて、アン・ロールズは、デュルケムのレガシーをゴフマンとガーフィンケル (そしてサックス) が継ぐことができた理由を、かれらが担っていたユダヤ人としての経験がもたらした「二重意識」によるものだとしている (Rawls, 2023b)。

W.E.B. デューボイス (1903) が二重意識と呼んだような経験が、彼らにとってこのような意識の高まりであったことは、彼らの初期の教え子の多くがユダヤ人であった理由や、多くの社会学者が彼らを誤解していただけでなく、彼らの仕事を奇妙に感じていた理由を説明するかもしれない。多くの周縁化された黒人学者と同様、これらユダヤ人社会学者もまた、周縁化とそれに対する防衛の必要性があっただけでなく、排除を

生み出す相互行為プロセスと相互認識に対して高い意識を持っていたという共通点があった。彼らの議論が相互行為的な細部に焦点を当てたのは、彼らが「ノーマル」(この用法の詳細については『ステイグマ』を参照) と呼ぶ人々よりも、その細部と、それが社会的事実を作り出す上で果たす役割をより認識していたからである。(Rawls, 2023b: 179)

こうしたユダヤ人としての「二重意識」によってゴフマンとガーフィンは、既成の社会学の基盤を脅かすような形で、戦前のシカゴ学派の相互作用論とは異なる新しい相互行為論を打ち立てることができたとアン・ロールズは整理する。それは、それぞれ「相互行為秩序」(Goffman, 1983; Rawls, 1987)「信頼条件」(Garfinkel, 1963)「メンバーの方法」(Garfinkel, 1967)と云った形で、状況化された社会的空間と、そこでどのように社会的事実とアイデンティティが達成されるかを探索するものとして成立したと位置づけられている (Rawls, 2023b: 180)。

五 結論

以上のように、アン・ロールズの「状況の社会学」構想においては、デュルケムの社会秩序観およびそこから引き

出される構成的秩序の概念が、相互行為研究を導くものとして設定されている。そして、それはデュルケムのなかにゴフマンとガーフィンの相互行為研究の萌芽を見出す形だけでなく、ゴフマンとガーフィン自身自身の理論的関心の根底にデュルケムを見出す形でも行われている。このようにして、現在理論的には袂を分かっているかのように見える二人は、デュルケムの正統な後継者として位置づけなおされている。こうしたアン・ロールズの「状況の社会学」構想は、社会学史の再構成として一大事業であるといえるし、これまで世に出ることのなかった歴史資料に基づく情報整理は、ゴフマン研究、エスノメソドロジー双方の射程の広がりや再検討するきっかけになることが予想されるだろう。

一方で、現在のエスノメソドロジストやゴフマン研究者、そのほか相互行為研究に携わる者の間で一定程度共有されてきた学説史的理解に対して、アン・ロールズの学史がどれだけの理論的衝撃を与えているかは、検討の余地がある。たとえば、デュルケムからガーフィンの影響や、ゴフマンとの理論的断絶などは、これまでも指摘されてきたことである (Hilbert, 1995 = 二〇一六)。さらにアン・ロールズの学説史整理は、少なからず彼女自身の経験的研究の関心の影響を受けているように思われる (Rawls and Duck, 2020)。この経験的研究への関心が理論的考察にどのよう

な影響を与えているかは慎重に検討しなくてはならない。また、本稿では検討できなかったが、構成的実践の概念の整理には、アン・ロールズの父であるジョン・ロールズの構成的規則の議論 (John Rawls, 1955) の影響もあることを、本人が示唆している (Rawls, 2009)。そのことは本稿でアン・ロールズ特有の強調点であった「正義」の強調にも明らかである。その意味で、「状況の社会学」はジョン・ロールズの正義論の社会学バージョンであるのかもしれない。

ただし、個々の研究として社会的正義に直接的な関心に向けない場合でも、社会学としての相互行為研究の出自を捉えておくことは重要だろう。ゴフマン理論を用いて社会的場面の記述を行うにせよ、エスノメソドロジー研究を行うにせよ、それらは、われわれがどのように実践の道徳性を生み出しつつ、そのなかで行為しているのかを解き明かすものである。それは言うなれば、人がいかに社会とともにあるのかを探究することに等しい。この極めて根本的な社会学的課題に、相互行為の社会学研究は、直接的に、あるいは間接的に、向き合っている。状況の社会学という呼び名は、こうした社会学としての根本的な出発点に立ち戻る契機を与えてくれるものであると思われる。

註

- (1) 本稿の準備作業として二〇二四年二月二七日に開催されたシンポジウム「状況の社会学におけるエスノメソドロジーの位置」において、筆者はアン・ロールズによるゴフマン・ガーフィンの往復書簡研究 (Rawls, 2023b) を紹介した。ロールズによる往復書簡の整理によれば、一九五〇年代後半から六〇年代にかけてのゴフマンとガーフィンの一九六一年〜六三年にかけて「パッシング」に関する共同研究プロジェクトを企画していたが、その計画が頓挫したことにより、ゴフマンは『ステイグマ』(1963 = 「一九七〇」二〇〇一) を、当初の計画を変更してガーフィンを参照しない形で執筆しなければならなかったようである。しかし、両者の知的交流は双方の原稿を送り合う形で継続し、ゴフマンがガーフィンの『エスノメソドロジー研究』(Garfinkel, 1967) の出版企画を後押しするなどの友好関係が続いていた。いずれにせよ一九六〇年前半に、両者の理論的なずれの違い(あるいはそれぞれの理論的先鋭化)が明確になる出来事があったことは注目に値するだろう。
- (2) 本節におけるアン・ロールズの個人史については、Wikipediaの記述を参考にしている。

- (3) 博士論文のタイトルは「構成的正義：社会秩序と人間の価値理解のための相互行為論的貢献」(“Constitutive Justice: An Interactionist Contribution to the Understanding of Social Order and Human Value”)であり、社会秩序と社会正義の不可分性や、実現可能な倫理は、社会的事実が生み出される相互行為の構成的要件に立脚していなければならないと主張している。

- (4) アン・ロールズが人種差別への関心を高めていたのはとても個

人的な理由だったという。当時彼女には父親が黒人の息子がおり、その息子が生まれたとき、実家の近所の人が「親切にも」Atlantic Monthly 紙の「黒人は劣っている」という内容を論じた記事を持ってきたのだという。そのような無自覚に行われた差別経験から、アフリカ系黒人の歴史の勉強をしないと考えたのだが、当時ひとりで非常に貧しかった彼女は、三〇ドルで参加できるハーバード大の夜間学校に参加した。ロールズは数年そのコースを履修し、アフリカ哲学や黒人の歴史についての本を読んだが、それらがすべて西洋中心主義を抜け出せていないことから、「理論を修正する」必要を感じたのだという(インタビュー動画“Taking Theory with Anne Rawls”より)。

- (5) 近年は「(代替的な) 相互行為の社会学」と呼ぶこともある。むしろ sociology of situation という言葉をキーワードとして用いられてくるロールズの文献は Rawls (2003) 以外には、今回の文献調査の範囲では見当たらない。しかし、本プロジェクトでは、ガーフィンの『エスノメソドロジー』だけでなくゴフマンにも他の社会学者に比して特別な位置づけを与えているロールズの学史観を鑑み、「状況の社会学」という言葉をキーワードとして用いることとする。

- (6) こうした全体像を、アンロールズは二〇〇〇年代初頭から構想していたようである。ただし、実際の研究業績としては、ロールズ初期キャリアのゴフマン研究(八〇年代末)、二〇〇〇年代前半までのデュルケム研究(『宗教生活の基本形態』『社会分業論』の読解)、二〇一〇年代からのガーフィンの『アイカips 研究を通して、徐々に体系化されていった様子が見てとれる。

(7) こうしたデュルケムの議論はワイトゲンシュタイン、ウィンチの議論とも関連性を持つものであるとアン・ロールスは指摘する (Rawls, 2011)。

(8) 「私は一九九〇年代初頭から、ガーフィンケルはデュルケムの「構成的実践」論 (Rawls, 1996; 2004) を基礎にしていると見るべきだと主張してきたが、最近、一九六二年のサックスとの議論においてガーフィンケルが同様の指摘をしている音声が見つかった (audio Garfinkel Archive)。当時、サックスが強硬に反対したため、ガーフィンケルはこの議論から手を引いたのかも知らない。彼はデュルケムという根拠を必要とせず、自分自身でその議論をすることができたし、実際にそうしていた。しかし、当初は懐疑的であったが、一九九〇年代初頭に私自身の研究の中でこの議論が再浮上したとき、彼は非常に興奮したことを報告でる。」 (Rawls, 2023b; note 13)

(9) ガーフィンケルのアーカイブ研究によってあきらかになった初期研究の詳細や、音声記録によって、ガーフィンケル、ゴフマン、サックスらがユダヤ人の人種としての周縁性に関心を持っていたことも報告されている (Duck and Rawls, 2023)。

文献

Duck, Waverly, and Anne Rawls, 2023, "Black and Jewish: 'Double Consciousness' Inspired a Qualitative Interactional Approach That Centers Race, Marginality, and Justice," *Qualitative Sociology*, 46 (2): 163-98.

Durkheim, Emile, 1893(1933). *The Division of Labor in Society*, trans.

George Simpson. Chicago: Free Press. (=二〇一七「一九七二」田原音和訳『社会分業論』筑摩書房)

——, 1912(1915), *The Elementary Forms of the Religious Life*. Chicago: Free Press. (=二〇一四「山崎亮訳『宗教生活の基本形態上』『宗教生活の基本形態下』筑摩書房」)

Garfinkel, Harold, 1963, "A conception of, and experiments with, "trust" as a condition of stable concerted actions," O.J. Harvey, ed., *Motivation and Social Interaction: Cognitive Determinants*, New York, Ronald Press: 187-238.

——, 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Cambridge: Polity Press.

Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday. (=二〇二三「中河伸俊・小島奈名子訳『日常生活における自己呈示』筑摩書房」)

——, 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall. (=「一九七〇」二〇〇一「石黒毅訳『ステイグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房」)

——, 1983, "Presidential Address: The Interaction Order," *American Sociological Review*, 42: 854-67.

Hilbert, Richard A., 1995, "Garfinkel's recovery of themes in classical sociology," *Human Studies*, 18: 157-75. (=二〇一六「中川敦・松木洋人訳『ガーフィンケルによる社会学の古典のテーマの再生』『総合政策論叢』第三二号: 一一七—一二六」)

Rawls, Anne Warfield, 1987, "The Interaction Order Sui Generis: Goffman's Contribution to Social Theory," *Sociological Theory*, 5 (2): 136-49.

——, 1996, "«Durkheim's Epistemology: The Neglected

- Argument», *American Journal of Sociology*, 102(2): 430-482.
- , 2000, “‘Race’ as an Interaction Order Phenomenon: W.E.B. Du Bois’s ‘Double Consciousness’ Thesis Revisited,” *Sociological Theory*, 18 (2): 241–74.
- , 2001, “Durkheim’s Treatment of Practice: Concrete Practice vs Representations as the Foundation of Reason,” *Journal of Classical Sociology*, 1(1): 33–68.
- , 2003, “Orders of Interaction and Intelligibility,” *Goffman’s Legacy*: 216–53.
- , 2004, *Epistemology and Practice: Durkheim’s the Elementary Forms of Religious Life*, Cambridge University Press.
- , 2009, “An Essay on Two Conceptions of Social Order: Constitutive Orders of Action, Objects and Identities vs Aggregated Orders of Individual Action,” *Journal of Classical Sociology* 9 (4): 500–20.
- , 2010, “Social Order as Moral Order,” *Handbook of the Sociology of Morality*: 95–121.
- , 2011, “Wittgenstein, Durkheim, Garfinkel and Winch: Constitutive Orders of Sensemaking,” *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 41 (4): 396–418.
- , 2012, “Durkheim’s Theory of Modernity: Self-Regulating Practices as Constitutive Orders of Social and Moral Facts,” *Journal of Classical Sociology*, 12 (3-4): 479–512.
- , 2019, “Introduction to Garfinkel’s ‘Notes on Language Games’: Language Events as Cultural Events in ‘systems of Interaction,’” *European Journal of Social Theory*, 22 (2): 133–47.
- , 2020, “Developing Ethnomethodology: Garfinkel on the Constitutive Interactional Practices in Social Systems of Interaction,” *The Cambridge Handbook of Social Theory*: 343–68.
- , 2021, “Durkheim’s Self-Regulating ‘Constitutive’ Practices: An Unexplored Critical Relevance to Racial Justice, Consensus Thinking, and the COVID-19 Pandemic”, Nicola Marcucci ed., *Durkheim & Critique*, Springer International Publishing: 227–63.
- , 2022, “Situating Goffman’s ‘Interaction Orders’ in Durkheim’s social fact lineage: Grounding an alternate sociology of modernity in heightened awareness of interaction,” *Emografia e ricerca qualitativa*, XV (1): 27–62.
- , 2023a, “Consensus vs. Situated Constitutive Practices: Mapping Developments in the Role of the Expert at RAND After WWII onto Key Issues in Sociology,” *The American Sociologist*, 55: 105–19
- , 2023b, “The Goffman-Garfinkel Correspondence. Planning «On Passing»,” *Emografia e ricerca qualitativa*, XVI (1): 175–218.
- Rawls, Anne Warfield, and Waverly Duck, 2020, *Tacit Racism*, University of Chicago Press.
- Rawls, Anne Warfield, and Jason Turowetz., 2021a, “‘Discovering Culture’ in Interaction: Solving Problems in Cultural Sociology by Recovering the Interactional Side of Parsons’ Conception of Culture,” *American Journal of Cultural Sociology*, 9 (3): 293–320.
- Rawls, Anne Warfield, and Jason Turowetz., 2021b, “Garfinkel’s Politics: Collaborating with Parsons to Document Taken-for-Granted Practices for Assembling Cultural Objects and Their Grounding in Implicit Social Contract,” *The American Sociologist*, 52 (1): 131–58.

Rawls, John, 1955, "Two Concepts of Rules," *The Philosophical Review*, 64(1): 3-32.

Turowetz, Jason, and Anne Warfield Rawls, 2020, "The Development of Garfinkel's 'Trust' Argument from 1947 to 1967: Demonstrating How Inequality Disrupts Sense and Self-Making," *Journal of Classical Sociology*, 21 (1): 3-37.

参考文献

"Taking Theory with Anne Rawls", <https://youtu.be/js9ux4U/1A?feature=shared> (二〇二四年九月二十八日アクセス)

付記

本稿はJSPSの科研費 JP22K113650, JP24K05257 の助成を受けた研究成果の一部である。